OPAC 評価の実際（若干のまとめ）

渡邊隆弘（神戸大学図書館）

●データベースの基本的な機能

かつては難しかったことが、Web-OPAC では当たり前に実現

・空間的制約の打破（どこからでもアクセス）
・特殊な機器・環境は不要（PC さえあれば）
・時間的制約の打破（24 時間稼働）

OPAC で全蔵書をカバー

・都道府県立レベルでも遡及入力は急速に進展
（大学図書館ではまだ大きな問題）

データの更新頻度

・即時更新（「貸出中」等のステータス情報も含めて）が当たり前に

検索の応答速度

・データベース技術の進歩
ヒット件数の多寡に関わらず、高速に検索集合作成
（ただし、一覧表示の応答速度は表示件数に依存）
→ ヒット件数と「最初の 10 件」なら高速に提供可能
・インターネット検索エンジンの応答速度
→ 遅いシステムは、従来以上に「目立つ」

基本機能はかなりの割合でクリア
→ 検索・表示そのものが問題に

●検索語入力画面のインターフェース

検索対象の限定

・図書、雑誌、ＡＶ、その他
・**図書検索と雑誌検索**
分けて扱う傾向が強かった　→　最近はそうでもない
統合的に検索できて当然
（年鑑、白書、統計… 自明に分割できるものではない）
→ デフォルトは「全資料対象」であるべき
・ＡＶ、電子資料等をどこまで細かく媒体区分するか？

・地域資料等の取扱い
　特別な資料群はそれのみに限定して検索可能とするべき

検索語入力フィールドの設計

A.対象項目ごとに枠設定
「何から検索できるか」がマウス操作なしにわかる
画面の肥大化、利用者への圧迫感

B.対象項目をプルダウンメニューに（ふつうは複数枠を設定）
入力枠を減らしてコンパクトに
内容の同じプルダウンが複数あるわかりにくさ

C.簡易検索では全項目対象とし、枠は一つ
ひたすらシンプル

・大学図書館ではC.が主流
空白で区切ると論理積（AND）
検索エンジンとの親和性

・公共と大学の違い？
「何から検索できるか」を利用者に伝える？
→ ヘルプの役割では？

・詳細検索画面
項目ごとの枠設定かプルダウンか？
すべての対象項目を画面に示す必要はない
限定して意味のある項目　＋　「全項目」
例えば「注記」・・・注記だけに限定して意味があるか？

●キーワード検索の諸相

かつては、書誌記述とは別に**「検索キーワード」を別途入力**して検索に供していた
数に制限、長さに制限、使える文字種に制限…
その後、**書誌記述からのキーワード自動切り出し**
空白等を区切りとみなして切り出し
→ 分かち書きされたヨミからは単語ごとに切り出されるが、
分かちのない表記形は全体形しかき切り出せない
今では、**検索対象フィールドに対して、「全文検索」手法**
「タイトル」：　タイトル中のどこかにその語があればひっかかる

全文検索の２方式

・形態素解析法
辞書と照らし合わせて単語に分割し、キーワードとして格納
例）「図書館の学校」　→　「図書館」「の」「学校」
長所：「意味」に沿った手法

短所：分かち書きを利用者に強制
→ 解決をはかっているシステムも
システムの辞書に依存
（固有名詞や古い当て字などは間違える可能性）

・N-グラム法

決まった字数に分割し、順次キーワードとして格納

例）「図書館の学校」→「図書」「書館」「館の」「の学」「学校」

利用者の入力した検索語にも同様の分割を行う

→単純かつ完全な「中間一致検索」が実現

長所：機械的（間違いの発生する余地がない）

短所：機械的（「京都」で検索すると「東京都」もヒット）

・どちらがベターかは難しい

キーワードの「正規化」

・意味のない違いを意識せず検索できるように

カタカナとひらがな、大文字と小文字、記号類の無視、旧漢字と新漢字

・検索時に（のみ）対処するのは非効率

Cat or CAT or cat or cAT or CaT or …

→ 索引時（データベース格納時）に、どちらかに強制変換

・カタカナ・ひらがな、大文字・小文字、記号類は、できて当たり前

清音・濁音　やらないほうが（ノイズが多すぎる）

長音記号　　難しい問題

異体字　　やるべきだが、文字種も多く関係複雑

例）NACSIS WebCat

・表示用データと検索用データの分離が前提

・インターネット検索エンジン（正規化はほとんどされていない）

●高度な検索機能

主題検索のサポート

・同義語辞書

辞書の信頼性が鍵　→ 多くは企業秘密でブラックボックス

・分類表の利用

十分使えるものになっているかは疑問

視覚的アクセス、分類表の名辞と索引語、…

・件名標目表の利用

まだこれから

内容情報の増強

・内容細目、内容紹介、帯情報

広がりつつある
検索精度の問題を考える必要

●表示機能とナビゲーション

一覧表示とソート

一覧表示の限られたスペースに何を出すのか
「最初の著者だけ」仕様が多い　→「ほか」と出したほうが…
ソート機能は案外充実（大学図書館よりも？）
検索エンジンのような「ランキング表示」の可能性
大規模蔵書の場合、内容情報が充実してきた場合

書誌情報の詳細表示

必要最小限の項目 vs. 全部出す
絞り込みすぎの感のある OPAC も
ブラックボックス（なぜヒットしたかわからない）→ 無用の不安感
ハイライト表示ができるとなおよい

ナビゲーションのための配慮

画面の統一性
そこに至る経緯を表示すべき
何で検索してそこへ到達したのか
検索履歴の再利用（有効性がどれだけあるか）
ハイパーリンクの有効活用
著者や件名をクリックすると当該の一覧表示に
典拠コントロールが満足できるレベルにないと逆効果も

●ヘルプ機能

絶対に、司書が書くべき

メーカーに「わかりやすいヘルプ」を要求しても無理
随時書き換えられる仕様を要求
新しいシステムに対して、動く前に完璧なヘルプは書けない

用語の使いかた・説明のしかた

本当に難しい…
多少長くなっても、例示を入れるべきでは

ヘルプの単位

ピンポイントで示せ、かつ通読もできるのが望ましい